

三根谷 徹氏の『中古漢語と越南漢字音』に対する 授賞審査要旨

著者三根谷 徹氏は、東京大学文学部言語学科在学中より、ベトナム（越南）語の言語学的研究に志し、現在に至るまで黙々としてその研究に没頭している。本書はその主要な業績である。

本書は第一部「中国音韻学の研究」と第二部「越南漢字音の研究」の二部から成っている。著者の研究の主体はこの第二部の越南漢字音の研究にある。ベトナムは日本および朝鮮とともにいわゆる「漢字文化圏」に属し、漢字文化によってその文化の伝統を育ててきた。従って古くは正式な文書は漢字・漢文で書かれ、漢字音を体系のまま取り入れていること日本や朝鮮と全く同様であった。ただ、ベトナムでは一九世紀に至ってフランスの支配下で漢字の使用を罷め、ローマ字でベトナム語を書くようになった。しかもと漢字で書かれた多数の漢語はローマ字化されて今日も使用されている。

ベトナム語の歴史、特にその音韻の歴史を研究することは現代ベトナム語を理解する上にも、また一般言語学にとつても重要なことはいうまでもない。ただ、ベトナムにおいては、その言語の歴史を知る史料が極めて乏しい。その点、日本は甚だ恵まれており、古くは上代に遡り得る。これに比して朝鮮はハンゲルが発明された一五世紀半ば以降しか知られないが、ベトナムの場合は更に手掛かりが少ない。中国の『華夷訳語』の中の「安南訳語」とか、漢字

に做つてベトナム語を表す俗字（字喃チャナム：例えば匹 *ba* 𠵼）などが、断片的にベトナム語の音韻の古相を探るに利用されることがあるが、体系的な知識は得られない。ただ、フランスの神父 Alexandre de Rhodes の *DICTIONAIRE ANNAMITICVM LYSITANVM ET LATINVM* [越葡羅辭典]（一六五一年刊）が一七世紀のベトナム語の詳細な記述を残しているので、これがベトナム語の音韻を体系的に知る基礎になる。しかし、日本でも朝鮮でも音韻の最も古い段階を知ろうとすれば、それぞれ中国語から体系的に借用した漢字の字音を考察する所から出發する。ベトナム語もそうである。というのは、幸い中国の漢字音の研究は Henri Maspero, Bernhard Karlgren のようなヨーロッパの学者の手によって本格的な言語学の方法に基づいて試みられているので、この中国の漢字音の歴史と対比することによってベトナムの漢字音の特徴を明らかにし、その変遷を考えることができるばかりでなく、それによってベトナム語固有の音韻史を研究することができるからである。

Maspero や Karlgren およびその他中国やわが国の学者はまず隋の韻書（韻の分類による発音字書）『切韻』（六〇一年）に基づくいわゆる「中古音」（本書では「中古漢語」）の研究から研究を始める。しかしこの「中古音」についても問題とすべき点が数々ある。著者は若い頃からベトナム語の研究の傍ら、中国音韻学に興味を懐き、その本格的な考察に着手した。Maspero や Karlgren は『切韻』の音韻体系を漠然と唐代長安音の体系と考えていたが、中国の陳寅恪・わが国の有坂秀世によって『切韻』は六朝時代の河南音（標準音）であることが明らかにされ、唐代長安音を示すものでないことがわかって来た。著者は諸先学の業績を批判し検討した結果、著者独自の中古音の体系化を完成し、従来『切韻』に関する種々なる疑問（たとえば、「重紐」：中国独自の表音法である「反切」で一見同音のよ

うに見え、実は微妙な違いを示すもの、Karlgren や Maspero はそれに気付かなかつた)の解明に明快な解決を与えた。

その「中古音」の知識の上に立って越南漢字音を觀察し、その音韻体系が慧琳の「一切経音義」の反切に反映される唐代音とよく一致することを発見した。この慧琳音は朝鮮漢字音の主層とも日本の漢音とも一致するもので、越南漢字音はこの兩者とともに唐代に遡るといふ興味ある事実が確認された。もつとも、越南漢字音には慧琳音とは異なる点もあり、それは唐代音が導入される以前に中国から伝えられたもので、長安音以前の古い段階に属するものである。丁度、日本字音でも漢音以前に呉音が入れられ、また朝鮮字音にも若干の唐代音以前の古い層が認められるのと同様である。なお、著者は、越南漢字音の追及に当たって、Rhodes の辞典はもちろん、「安南訳語」や「字喃」を参照しながら、一方、ベトナム語と同系のムオング語や隣接するタイ語系諸言語中のベトナム語からの借用語との比較に絶えず留意し、微細な点も見逃していない。なお、本研究はベトナム語の研究に資すること大なるに留まらず、中国語音韻史研究にも寄与するところが多い。巻末の「中古漢語 (AC) 索引」は研究者に有益な指針を与える。

本書第Ⅱ部の「越南漢字音の研究」は一九七二年財団法人東洋文庫論叢第五三として刊行されたものの改訂版であるが、それは誤植の訂正などの外面的な改訂だけでなく、旧版刊行以後著者の緻密な研究によって内容的にも重要な改新を加えており、面目を一新していると言つてよい。

第Ⅰ部「中国音韻学の研究」に収められた諸論文は越南漢字音研究の基盤をなす中国音韻学に対する著者独特の考察を述べたものである。この第Ⅰ部の論文集で注目すべきは、宋代の、音韻の図表である「韻鏡」に関する研究で、

『韻鏡』についてはいろいろな学者の論著も数多く出ているが、著者の洞察に及ぶものはない。

なお、第Ⅰ部には中国音韻学の研究に直接関係するもの以外に、ベトナム語自身に関する研究、たとえば、「安南語の声調の体系について」のようなものも入っている。著者は、本書には含まれていないが、ベトナム語の要を得た概説を、市河三喜・服部四郎共編の『世界言語概説下巻』（研究社、一九五五年）に「安南語」の名をもって公にしている。著者は現在わが国のベトナム語の本格的な言語学研究の第一人者である。